山陽新聞『一日一題』より　第二回

いのち言葉と居場所

久しぶりに会った仲間が、「お元気ですか」と尋ねてくれた。数年前私が入院したのをおぼえていて、いつもこう尋ねてくれる。私は見守られている気持ちになる。

昔、校長が「疲れているね。難しい仕事をしてもらっているから」と声をかけてくれたのを思い出す。多くの事例をかかえ悪戦苦闘のときであり、この声かけの裏にある「見守りのまなざし」が私を元気にさせてくれた。

私に贈られたこの二つの言葉は、私の存在（ビーイング）を癒し温める言葉でありこのような言葉を「いのち言葉」という。それに対して、何かをさせる（禁止する）ための道具として使われる言葉を「道具言葉」という。この言葉は指示・命令に便利なので、多忙な社会では多く使用されることになる。「ハヤクしなさい」等々である。

しかし道具言葉に偏ると、聞かされる側は支配されているのを感じ、「自分の存在が否定された」と感じることを知っていてほしい。「頑張りなさい」「こうした方がいいよ」という善意の言葉でさえ「今のあなたはダメよ」という「否定のメッセージ」として伝わることがある。

競争に勝つための効率化が求められる時代である。そんな時代を反映してか、険しい道具言葉に傷つき、生命力が枯渇しつつある人が増えている。様々な場面で「見守られている実感」を得て、多くの人々がこの力を取り戻すことを考えなければ、真の意味での競争力などつくはずもない。その意味で、「学校にも家にも居場所（温かなまなざしの場）がない」という子どもの訴えは日本社会への重要な提言であり警告である。しっかりと傾聴してほしい。

沢田の杖塾　主宰　森　口　章

（二〇〇七年　六月十四日夕刊掲載）